

大通公園を望む窓辺から

哀愁のコルドバ

常任理事 青木 秀俊

約8年前より娘夫婦のドイツ移住により、毎年夏季休暇をヨーロッパ旅行で過ごしてきた。ヨーロッパ旅行というと高価なイメージだが、必ずしもそうではない。ドイツとの往復は、せっせと貯めた特典航空券を利用し、また8ヵ月くらい前よりLCCやホテルなどを予約するとかなり安い。また南ヨーロッパの物価は、日本の1/2～2/3程度である。

一昨年の夏に、南スペインをレンタカーでのんびり周遊した。まず南スペイン地中海沿岸のマラガまで飛んでレンタカーを借り、マルベリヤ、ジブラルタル経由グラナダ、セビーリヤ、そして高速列車AVEで最終地マドリッドへ入り、日帰りのポルトガル・リスボン観光も楽しんだ。さて私はレンタカー運転の少しでも手助けになればと日本で国際免許を取得して行ったが、スペインの郊外の交差点はほとんどがロータリー交差点であり、またスペイン人はかなりのスピードで出入りし、流入出路は5本以上が普通で、ナビは英語である。旭川市内のロータリーに慣れている私でも、すぐに運転は無理と判断し、娘夫婦にすべてお任せとなった。

グラナダからセビーリヤへの移動日に時間的余裕ができ、少し遠回りとなるが世界遺産都市のコルドバに立ち寄ることにした。コルドバと聞いた時私は、クロードチャリの「哀愁のコルドバ」を思い出した。確か教養2年か学部1年の頃、友人のY君の下手なギター演奏の「哀愁のコルドバ」をいやというほど聴かされ記憶に残っていたのである。コルドバは、イスラム教のモスク（メスキータ）がその後キリスト教の礼拝堂として改築され、またユダヤ教の寺院や迷路のようなユダヤ人街も存在する、まさに中世にタイムスリップしたような神秘的な、思い出に残る哀愁の街であった。

わが町小樽の一部は中華街か？

監事 津田 哲哉

小樽市内観光の一番のホットエリアである堺町周辺は、多くの観光客であふれています。昔、北のウォール街といわれた銀行ビル街の交差点からオルゴール堂のあるメルヘン交差点までを通称堺町通りといわれ、現在は、当時の建物を再利用した観光客用の土産物屋、海鮮食堂、寿司屋が並んでいます。また、ルタオ、北葉楼などのスイーツの店舗やガラス工芸の店もあり人気を得ています。

今年、市の人口は11万人台となり毎年2000人近くの減少をみえています。一時、観光客数は年間500万人に落ち込みましたが、この3～4年間は増加し、平成26年には800万人とV字回復をしております。この要因としては、冬季イベントの企画・宣伝など広報活動を強化して冬の小樽の魅力が全国や海外に広まり、それに伴いアジア系、特に中国人観光客の増加が顕著となりました。観光客の通年化と、国際化現象がみられました。また、日帰り観光客が圧倒的でしたが、宿泊客も増加し市内のホテルは予約が取りづらく、ゲストハウスも増加しております。

外国人として中国人が多く、次いで韓国、台湾、タイ、シンガポールの順で、中国人系観光客が抜きだしてあります。以前は閑散としていた冬場に、雪の降る中、駅から運河へ向かう通りを蟻のようにゾロゾロと列を連ねて観光しております。札幌、小樽間の電車内や、街の交差点での信号待ちの時などは、中国系観光客の大きな声が飛び交い、その中に囲まれば時々、自分がこの国にいるのか錯覚を起こしそうになります。今は観光客の増加で経済的恩恵を受け喜ばしいことですが、これがいつまで続くのか一抹の不安を感じます。さらに、中国系マネーが小樽の土地やホテルを買収していると聞いており、市民の予想より進んでいるかもしれません。景気に浮かれていると、目が覚めたら街の交差点だけでなく、堺町が中華街化していたという悪い夢になりませんように祈っております。

